

PRESS RELEASE

【報道関係各位】

巴里を魅了した乳白色のカンヴァス
未公開作品をふくむ藤田初期の絵画を中心に

渡仏から110年

藤田嗣治展

2023年3月2日(木)～7月31日(月)



山王美術館

SANNO ART MUSEUM

開催趣旨

藤田の画と言ふ世界にほかの人の画でない特に一ツまるで変つた画でなければならぬ。

(資料番号19書簡 1913 (大正2) 年11月10日)

何れの真似でもないもので初めて世界の藤田であつて画が貴い宝となる

(資料番号20書簡 1913 (大正2) 年11月19日)

藤田嗣治『藤田嗣治 妻とみへの手紙 1913-1916上巻』人文書院、2016年

世界的な画家になることを夢見てパリへと渡り、やがてエコール・ド・パリを代表する画家の一人として活躍した藤田嗣治(1886-1968)。2023年は、藤田が初めてパリへ渡ってから110年目にあたります。

東京美術学校(現・東京藝術大学)を卒業後、文展に3年つづけて落選し悲憤する藤田ですが、父のすすめもあり、1913年に待望のパリ留学を果たします。留学初期より世界を意識し、「何れの真似でもない」、「全くその人独特の」絵を描く画家となることを目指した藤田。ピカソ、モディリアーニ、キスリングら同時代の画家たちと交流を図る一方で、古代エジプト、ギリシア時代の古典芸術に学びながらも、独自の画風を確立するべく研鑽を重ねます。1917年6月にはパリ・シェロン画廊での初個展が好評を博し、1919年11月のサロン・ドートンヌでは、初出品ながら油彩画2点、水彩画4点のすべてが入選するという快挙をおさめ、会員へと選出。1921年11月のサロン・ドートンヌに出品した裸婦像をはじめとする3作品は、「素晴らしき乳白色(grand found blanc)」と称賛を受け、パリ画壇の寵児となるのです。

本展では、初公開となるパリ留学前の希少な作品から、藤田の代名詞ともいえる「乳白色のキャンバス」にいたる初期の作品に焦点をあて、藤田の画風確立の変遷をたどります。

ポイント① コレクションのみでたどる「藤田嗣治」創作の軌跡

本展ではパリ留学前の作品から、モノトーンを思わせる色調の哀感ただよう「パリ風景画」、細くしなやかな線描と鮮やかな色彩により緻密に描かれた「水彩画」を経て、パリ美術界を魅了した「乳白色のキャンバス」にいたる藤田初期の作品に焦点をあて、藤田の画風確立の変遷をたどります。

ポイント② 「藤田嗣治」コレクションを全公開

山王美術館のほこる「藤田嗣治」コレクションは、54点に及びます。

本展初公開となる若き日の作品から、「乳白色の裸婦像」とともに人気となった「自画像」、戦後に数多く描かれた「子ども像」まで、全コレクションを一堂に公開いたします。

ポイント③ 110年前に描かれた未公開作品《花》を初展示

本展が初公開となる《花》（1913年）は、藤田26歳の作品です。

1913年6月18日に憧れのパリに向け旅立った藤田。本作はパリ留学の費用を得るために描いた作品と言われています。また、渡仏前の作品の多くが第二次世界大戦中に失われていることから、パリ留学前の画風を知る上でも希少な作例です。描かれてから秘蔵されてきた藤田初期の未公開作品を初展示いたします。

第一章

～1913年

渡仏前夜

14歳の頃より画家を志し、中学校在学中よりパリ留学を夢見ていた藤田ですが、陸軍軍医であった父の上官・森鷗外の助言もあり、1905年に東京美術学校(現・東京藝術大学)に入学します。黒田清輝をはじめとする教授陣に師事しますが、その成績は30人中の16番目位と決して高いものではありませんでした。卒業して後は、白馬会や光風会などへ出品し入選するものの、文展には3年つづけて落選。画家としての道のりは険しいものでした。藤田待望のパリ留学がかなったのは、1913年のこと。父・嗣章のすすめもあり、かねてから念願であったパリ留学を決意し、憧れのパリを目指して1913年6月18日、日本郵船三島丸で横浜を出港するのです。渡仏前の作品は、第二次世界大戦下の空襲により、藤田の実家が全焼したこともあり、ごく少数の作品が確認されているのみですが、黒田清輝の指導のもと在学中に外光派風の表現を体得していたことが窺えます。

Close-Up

藤田嗣治《花》1913年

渡仏前に描かれた作品。

パリ留学前に描かれた本作は、陸軍大将・兒玉源太郎が没して後に兒玉家の家督をついだ、兒玉秀雄夫妻が長らく所蔵していた作品です。そもそも、兒玉源太郎は陸軍軍医であった藤田の父・嗣章の台湾時代の上官にあたり、本作が描かれた翌年10月には、源太郎の三女・元子と、嗣章の長男・嗣雄の婚儀が整い、兒玉家と藤田家は縁戚関係となりました。

兒玉家に伝えられている話によると、パリへの留学費用を得るため藤田自らが東京牛込の兒玉邸に3点の絵画を持参したといえます。そのうち本作を夫人が気に入り、以後、展覧会などへ出品されることもなく大切に継承されていきました。本展が初公開となる藤田初期の希少な作例です。



広報用画像①

【初公開】藤田嗣治《花》1913年、山王美術館蔵

第二章

1913～1917年

憧れのパリ

1913年8月6日、念願のパリに到着した藤田。1910年代前半のパリは、19世紀にはじまる印象主義による絵画の近代化を経て、マティス、ヴラマンクらフォーヴィスムによる色彩の解放、ピカソ、ブラックらキュビズムによる形態の革新など、従来のアカデミスムの範疇にとどまらず、新たな絵画表現をめざした作品が生み出されていた時代でした。こうした機運のなか、世界各国から若き芸術家たちがパリへと集い、あらたな芸術活動を推進していたのです。

渡仏初期より、「世界的な画家」としての成功を求めている藤田は、ルーヴル美術館で古代エジプト、ギリシア時代の作品の模写に励むなど、積極的に古代美術を研究しています。その一方、ピカソをはじめとする前衛的な画家たちと交流する中で、自らの表現を目指して模索をつづけました。

Close-Up

《口づけ》1914年、山王美術館蔵

藤田が後に出版した『腕(ブラ)一本』のなかで、渡仏初期に描いた500枚ほどは、自信を持つ15、6枚のみを残して皆燃やしたと記していることから、本作は藤田自身が手ごたえを感じて残した初期作品の一つであると考えられます。抑制された色彩表現と線描に基づく人体表現は、この後に藤田がパリ画壇において評価されることとなる、初期風景画や水彩画への展開を予感させます。



【初公開】藤田嗣治《口づけ》1914年、山王美術館蔵

© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2022 G2966

第三章

1917～1921年

初個展の成功、
サロン・ドートンヌ初入選

1917年6月、パリ・シェロン画廊で開催された藤田初の個展では、110点の水彩画を展示。開催前にほぼすべての作品が売れきれのほどであったといいます。藤田は当時の模様について、初日に足を運んだピカソが3時間にもわたって克明に鑑賞したこと、また数年の内にはマチスとピカソの間にフジタの絵が飾られるようになるだろうと新聞で批評されたと語っています。同年11月には同じくシェロン画廊で二度目の個展を開催し、水彩画を中心に油彩画を含む作品が展示されました。藤田初期の制作は水彩画によるものが中心でしたが、シェロン画廊で開催した個展の成功をうけ、1917年から1918年にかけて油彩によるパリ風景を集中的に描きはじめます。それらの多くは、アトリエから徒歩圏内に位置するパリ周縁部を、モトーンを思わせる色彩で描いたものでした。1919年11月のサロン・ドートンヌでは初出品した6作品すべてが入選。会員へと推挙され、パリ画壇での地位を確立していくこととなりました。

(展示予定作品)



藤田嗣治《パリのカフェ》1916年頃、山王美術館蔵

© Fondation Fujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2022 G2966



藤田嗣治《幼な子イエス礼拝》1918年頃、山王美術館蔵

© Fondation Fujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2022 G2966

第四章

1921～1931年

「乳白色」の時代

パリ留学以来、日本人画家として独自の絵画技法を模索する藤田は、やがてカンヴァスそのものが肌の質感をもつ画布をめざして研究を重ねていきます。さまざまな試行錯誤を経て、なめらかな白さを持つカンヴァスに、日本の筆と墨による細くしなやかな線描を生かした、裸婦像を完成させました。この藤田独自の「乳白色の下地」を用いた、自画像、裸婦、静物画の3点が1921年のサロン・ドートンヌに出品されると、たちまち大きな評判を得ることとなります。独自の画風によりエコール・ド・パリの寵児となった藤田は、画家としての名声が高まるとともに、次第に注文画もふえ、上流階級の女性たちの肖像画を多く手がけるようになりました。

(展示予定作品)



広報用画像②

藤田嗣治《椅子に座る婦人像》1925年、山王美術館蔵

© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2022 G2966



藤田嗣治《横たわる裸婦》1927年、山王美術館蔵

© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2022 G2966

第五章

1931～1938

中南米への旅立ち

作品そのものの魅力はもちろんのこと、黒髪のおかっぱ頭、丸メガネ、ちょび髭、ピアスと印象的な藤田の風貌がパリの人々の関心と呼ぶ存在となりました。当時、裸婦像とともに数多く描かれたのが自画像です。独特の風貌を自画像として描き、自らを作品化することで、自身と作品がより広く世間に認知されていきました。乳白色の裸婦像と自画像により、パリ美術界において名声を博しますが、1929年10月にアメリカ・ウォール街大暴落をきっかけとした世界大恐慌にともなう不況が重なり、経済的な苦境にたたされます。また、家庭生活でも破綻をきたした藤田は、1931年10月、パリを離れブラジルへと旅立ち、その後約2年にわたって南米各地を訪問。1933年に帰国し東京に定住して後も、日本各地またアジアへと旅を重ねました。この頃より画風に変化がみられるようになり、乳白色の画面から濃厚な色彩による作品へと展開していきました。

(展示予定作品)



広報用画像③

藤田嗣治《自画像》1931年、山王美術館蔵

© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2022 G2966

第六章

1938～1949年

戦時下のなかで

1938年10月、海軍囑託となり中国・漢口攻撃戦に従軍し最初の戦争画に取り組みます。翌1939年4月にアメリカ経由でフランスへと渡りますが、やがて第二次世界大戦が勃発。戦況の悪化により1940年5月に帰国を余儀なくされます。戦時下においては、陸軍・海軍の依頼により、戦線に取材した多くの作戦記録画を手がける事となりました。

一方、日本の美術界においては、1941年7月に帝国芸術院会員となり、10月には文化使節としてフランス領インドシナに派遣されるなど関係性が変化していきます。しかしながら、終戦後は戦争協力への責任が問われるようになります。1947年には戦犯の疑いが正式に晴れるものの、1949年3月にはニューヨークへと旅立ち、その後二度と日本の地を踏むことはありませんでした。

(展示予定作品)

《海の幸》1939年

《教会のある風景》1943年

第七章

1949～1959年

パリ永住

戦後間もなくより再渡仏を試みた藤田ですが、ようやくフランスへ渡ることがかなったのは、ほぼ1年間にわたるアメリカ滞在を経た1950年1月のことでした。1940年の日本帰国から10年ぶりのパリ帰還でした。パリに戻り、モンパルナスのアトリエに居を構え、再びパリの街並みや風俗を描くようになり、やがて子どもを主題とした数多くの作品に取り組み始めます。藤田が描く子どもたちは、実在のモデルがいるものではなく、画家自身の創作によるもので、「私の画の小供が私の息子なり娘なりで一番愛したい小供だ」と記しています。

のちに藤田は「フランスに永住するために戻ってきた」と語っていますが、1955年2月には妻の君代とともに、フランス国籍を取得し帰化しました。

(展示予定作品)



【初公開】藤田嗣治《室内(アトリエ)》1950年、山王美術館蔵

© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2022 G2966



藤田嗣治《パンを持つ少女》1954年、山王美術館蔵

© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2022 G2966

第八章

1959～1968年

レオナール・フジタとして

フランス国籍を取得した藤田は、1959年10月14日にシャンパーニュ地方のランス大聖堂にて、妻の君代とともにカトリックの洗礼をうけます。洗礼名は、レオナルド・ダ・ヴィンチにちなみ、「レオナール」と授けられました。以降、作品へのサインも洗礼名によるものとなります。また、1961年11月には終の棲家となったパリ郊外のヴィリエール＝バクルの農家を改装し、アトリエ兼住居とし、キリスト教を主題とする作品を数多く描くようになりました。1966年8月末には、念願であった礼拝堂をランスの地に完成させ、「ノートル＝ダム・ド・ラ・ペ（平和の聖母）礼拝堂」と命名。しかしながら、制作中より身体の不調を感じており、12月にパリの病院で手術をうけますが、1968年1月29日にスイスのチューリッヒ州立病院にて死去します。享年81歳でした。

(展示予定作品)



藤田嗣治《花》1963年、山王美術館蔵

© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2022 G2966

展覧会概要

- 展覧会名 渡仏から110年
藤田嗣治展
- 会期 2023年3月2日 [木] ~7月31日 [月]
- 開館日 火曜日・水曜日（ただし、3/21、5/3は開館）
- 開館時間 10時~17時（入館は16時30分）
- 会場 山王美術館

〒540-0001
大阪府大阪市中央区城見2丁目2番27号
TEL 06-6942-1117
H P <https://www.hotelmonterey.co.jp/sannomuseum/>
- 入館料 一般 1,300円
大学・高校生 800円
中学生以下 500円（保護者同伴に限り2名様まで無料）
*学生証をご提示ください。

広報画像に関するご案内

本展出品作品は著作権保護がなされております。広報用画像素材として出品作品3点の画像をご用意しておりますが、ご掲載にあたりまして、使用の範囲などが著作権管理団体より定められております。別紙「広報画像に関するご案内」をご一読いただきました上で、当館までお問合せくださいませ。ご協力のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

*詳しくは次ページの「広報画像に関するご案内」をご参照ください。

広報画像に関するご案内

重要

広報用画像につきましては、【紙媒体での掲載】に限り①②③の作品画像をご利用いただくことが可能です。ただし、以下のとおり使用に際しての範囲が別途定められております。この範囲内においてご紹介いただける場合のみとなっておりますので、ご理解のほどお願いいたします。

(著作権使用にあたっての範囲)

○紙媒体の掲載のみに限ります。WEB媒体でのご掲載にあたっては、別途著作権管理団体への使用許諾申請と使用料が必要となります。

○使用にあたっては、作品画像のちかくにクレジットを明記すること。

作家名、《作品名》、制作年、山王美術館蔵、

許諾クレジット(© Fondation Foujita / ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2022 G2967)

○展覧会情報に限定し、文字数が400字以内であること。

○作品の複製寸法 掲載サイズを50平方センチ未満にすること。

○原作品に忠実に複製使用すること。

全図にての使用をお願いいたします。

部分使用、作品への文字乗せやほかのイメージを重ねることはできません。

(その他の注意事項)

○作品画像の使用は本展を紹介する場合に限らせていただきます。

○展覧会終了後の画像使用はできません。

○掲載内容の事前確認のため、必ずゲラを当館担当者までFAXまたはメールにてお送りください。

○掲載誌(紙)を当館宛に2部(冊)ご寄贈ください。

以上を遵守いただけない場合、問題が生じた際、主催者では一切責任を負いかねます。

ご留意のほど、よろしくごお願いいたします。

なお、HP、携帯サイトなどへの二次使用につきましては、免除対象に含まれておりません。

画像使用はお控えください。

文章での紹介としていただければ幸いです(山王美術館ホームページへのリンク可)。

各媒体社のホームページ含め、WEB媒体での作品画像掲載にあたっては、

別途、著作権管理団体への使用許諾申請と著作権使用料が必要となります。

お問合せ先

広報画像使用に際しましては、まずは下記担当者までお問合せくださいませ。

当館より「広報用画像使用申込書」をお送りいたします。必要事項ご記入の上、FAXにてご連絡くださいませ。

一般財団法人 山王美術館

担当/亀井 里香(かめいりか)

TEL 06-6942-1117 FAX 06-6942-8700 E-mail r-kamei@hotelmonterey.co.jp

〒540-0001 大阪府大阪市中央区城見2丁目2番27号